

# 共同体帰属意識と主観的幸福感の規定因に関する研究

○北川夏樹 (Kitagawa Natsuki)<sup>1)</sup>・藤井聡 (Fujii Satoshi)<sup>2)</sup>

1) 東邦ガス株式会社 2) 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻

Keywords : 主観的幸福感, 帰属意識, 運命愛, 本来的時間性

## 1. 問題

幸福のためには、生活におけるどんな要素が重要であるか——そうした疑問に回答を探索するこれまでの研究の中で、人の幸福に影響を及ぼす要素の一つとして共同体への帰属 (belongingness) が注目されている。

実際、現在の日本が抱える様々な社会問題には、共同体への帰属の希薄化に関連するものが少なくないと考えられ、平成 19 年度の国民生活白書<sup>1)</sup>でも人々の「つながりの希薄化」が生活満足度の低下の原因となっているとの危惧が指摘されている。具体的には、離婚や家出による家族コミュニティの崩壊や、地域が過疎化、高齢化の進行により活力を失っている「限界集落」の問題や社会からのつながりを失った人たちの「無縁死」問題などが、そうした例として挙げられるだろう。

こうした現況を踏まえると、人々の深い帰属を促し、凝集性の高い共同体を構築することは、国民の幸福という観点からも意義は少なくないであろうと考えることが出来る。そしてそのような共同体施策の効果的な企画・実施のためには、人々の (共同体への帰属を促すであろう) 帰属意識が如何にして醸成されているのかについての知見を得ることが重要であるといえよう。

そこで本研究では四つの共同体(家族・地域・組織・国家)への人間の帰属意識に焦点を当て、その後存在し、ひいては人の幸福にもつながりうる心理要素について、探索的な検証を行った。そして新たに得られた知見に基づき、実際の人々の幸福を志向した共同体施策について考察を加えた。

## 2. 方法

本研究ではインターネット上でのアンケート調査により、下記のような心理傾向について測定した。取得データを統計学的に解釈し、各心理尺度間の関連性について検証を行った。

### 2.1 帰属意識の測定

#### 【組織コミットメント】

組織コミットメントは Porter et al(1974)<sup>2)</sup>の定義 (訳は高橋ら<sup>3)</sup>を参照)によれば「ある特定の組織に対する個人の同一化 (identification) および関与 (involvement) の強さ」と捉えられる概念であり、既

往研究では企業における従業員の退職意思<sup>4)</sup>や組織への貢献<sup>5)</sup>等との関連性が報告されている。

また、組織コミットメントを細分化し、その下位概念を構築する試みも進められている (c.f. 田尾 (1997)<sup>6)</sup>。本研究ではその内の①愛着要素、②内在化要素、③規範的要素に着目し、既往研究を参照しながら各尺度の質問項目を作成した。実際の測定尺度の一例として「家族」共同体へのコミットメント尺度の質問項目を表 1 に示す。

#### 【人間疎外】

帰属意識を表すもう一つ概念として、哲学者のヘーゲルが提唱した「人間疎外」に着目し、藤井ら<sup>7)</sup>の作成した人間疎外尺度を用いて、他尺度との関連性について検証を行う。

ヘーゲルは著書『精神現象学』の中で、人間精神の成長プロセスについて述べており、精神の成長における共同体への帰属の重要性を示唆している。それによれば人の精神は「意識」、「自己意識」、「理性」、「精神」、「宗教」、「絶対知」の段階を経て成熟し、四つ目の「精神」の章に「人間疎外」という概念が登場する。「精神」とは「共同体と個人の意識とが一体化し、個人が共同体の成員となる」段階である。これに至るにはまず、自己を共同体から疎遠化し、家族、国家等の共同体をその外部から認識する必要がある。そしてその後もう一度精神を共同体と一体化させることで、共同体への帰属意識を持つようになる、という課程が議論されている。

表 1 家族コミットメントの質問項目

田中(1996)<sup>8)</sup>を参照。7 件法で回答を要請し、全 11 項目の加算平均値を尺度値とする。

#### ①愛着要素

- ・自分の家庭の雰囲気が好きだ。
- ・家族のなかに心を開いて話し合える人がいる。
- ・家族と一緒に食事をしたり、話し合ったりするのは楽しい。

#### ②内在化要素

- ・家族の物の考え方・行動は理解できる。
- ・家族のためならたとえ自分が犠牲になっても仕方ない。
- ・家族が安心して暮らせるためには、努力を惜しまない。
- ・家族と私は運命共同体だ。

#### ③規範要素

- ・昔から続く家を受け継いで次代に渡すのは自分の務めだ。
- ・ほどほどの年齢になったら、家族を持つのは当然だ。
- ・家族を持っていないと、社会的に一人前でない。
- ・家族に流れる血のつながりを断ち切ることはできない。

ただし、こうした過程を想定した時、一旦外化された精神が共同体と一体化せず、どの共同体へも属さないと言うケースが生ずることとなる。ヘーゲルはこのような状態を「疎外」と呼称し、この状態にある人間精神の成長は停滞したままになってしまうと論じている。藤井らはこの「人間疎外」の状態についてヘーゲル自身が論述した同書の記述に基づいて、「家族」、「地域」、「組織」、「国家」の各共同体からの人間疎外尺度を構成している。

筆者らが本研究に先駆けて行った事前研究<sup>9)</sup>では、人間疎外尺度と後述の幸福感尺度を測定し、双方の間に有意な負の相関があることを、すなわち、共同体との精神的な結びつきの希薄化が人の幸福感を低減させるという可能性を実証的に示している。

表2 人間疎外尺度の質問項目

(\*上から1, 3, 4番目の項目は逆転項目)

- ・自分と〇〇(共同体名)とは、一心同体だという感じがする。
- ・〇〇とは、家族の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。
- ・私は〇〇をととも身近なものとして自然に感じる。
- ・自分が所属する〇〇に自らをなじませるのは当たり前だと思う。
- ・もしも自分一人の利益と〇〇の利益が対立したら、どちらを優先しますか。

## 2.2 幸福感の測定

本研究では幸福感の測定尺度として、主観的幸福感(Subjective Well-Being)を取り扱う。同概念はその名の通り、自分の生活、人生への主観的な満足感を表現するものである。

主観的幸福感とは、日々の生活経験における肯定的、否定的な感情に起因する「感情的幸福感(Affective SWB)」そして人生や生活全体への認知的な満足感である「認知的幸福感(Cognitive SWB)」から構成される(c.f. Diener et al.(1985)<sup>10)</sup>, Jakobsson, et al.(2009)<sup>11)</sup>。本調査では各々の幸福感について、事前研究<sup>9)</sup>と同様の方法で質問項目を設けた。

## 2.3 背後の心理要因の仮定

本研究では帰属意識の背後にある心理として、二人の哲学者の理論から演繹される概念を仮定する。

### 2.3.1 ニーチェの「運命愛」

一つ目はニーチェの提唱する「運命愛」概念である c.f.<sup>12)</sup>。死後の魂の救済や天罰への恐れに生の意義を見出すことを批判したニーチェは、現世に生きる「重心」を置いて真剣に生きることを説いた。現世に生きる意義を持つ以上、人生で遭遇するあらゆる事象や過去の出来事は、自らの運命に影響を及ぼしうる重要な意味を持つ。ニーチェはそれら全てに対して(ネガティブな側面も含めて)真摯に向き合い、それらを全て逃げずに力強く肯定すべしと論じた。

本研究では、ニーチェが、彼の読者に力強く推奨したこの「自らを取り巻く全ての環境、出来事と真剣に対峙する」姿勢を人々がどの程度持っているのか、という傾向を「運命愛傾向」と呼称する。

さて、この「自らを取り巻く全ての環境」には無論、当該個人が所属する共同体も包含されることと

なる。したがって、運命愛傾向が高い個人は、所属する家族や地域社会等に対しても「真剣に対峙することとなる。そこで本研究では運命愛傾向が帰属意識の規定因であるか否かを検証することを企図して、運命愛傾向の測定尺度を作成することとした。本稿ではそのためにニーチェの著書の中から運命愛について語られている箇所を抽出し、それに基づいて表3の項目を設定し、これをそれぞれ7件法で尋ね、それを加算平均することで尺度を構成とした。

表3 運命愛傾向尺度の質問項目

- ・良い物も、悪いものも含めてこれまで自分が迎ってきた全ての歴史から目をそらすような事はしない。
- ・将来自分が、どんな行く末を辿ろうとも、全て受け入れようと思っている。
- ・自分の将来については、たとえ嫌なことであっても、受け入れようと思う。
- ・自身の振る舞いは、自分の人生に影響を及ぼさざるを得ないと思う。
- ・これまで忌避されてきた側面を含めて、過去のすべての歴史があるからこそ、今の自分があると感じている。
- ・もう一度生まれ変わるとしても、今のこの人生を生きたいと思う。

以上に加えて、表3の項目を、家族、地域、組織、国家のそれぞれに対応させる恰好で、共同体別の運命愛尺度も作成した。一例として「家族」についての質問項目を表4に記す。

表4 運命愛傾向尺度の質問項目

- ・良いものも、悪いものも含めてこれまで家族が関わってきた全てのものから目をそらすようなことはしない。
- ・この先家族にどんなことがあっても、彼らと運命を共にしようと思っている。
- ・自分の家族に関しては、気に入らない面があっても受け入れようと思う。
- ・自身の振る舞いは、家族のあり方に影響を及ぼさざるを得ないと思う。
- ・もう一度生まれ変わるとしても、この家族に生まれたいと思う。

### 2.3.2 ハイデガーの「本来的時間性」

帰属意識を規定しうる構成概念として本研究では、ハイデガーの「本来的時間性」も取り上げることとした。彼は、将来遭遇しうるあらゆる可能性を先駆的に覚悟すると共に、過去の経験や歴史を「反復する人間こそが、「本来的時間性」の内に生きる存在であると論じた。特に将来への想定については自己に起こりうる究極の可能性である「死」についてまでも先駆的に覚悟することで、その他のあらゆる可能性を想定することができ、それらを加味した上で今を最善に生きる事ができるとした。ハイデガーはこの、「将来への想定や過去の記憶を踏まえる傾向性」のことを「本来的時間性」と呼んでいる。

ここで、自らを取り巻くあらゆる可能性に配慮した上で、現世を「真剣」に生きるという点で、本来的時間性とニーチェが論じた先述の運命愛概念との間には共通部分を見出すことができる。本来的に生きている人にとって、その生の重心が現世にあり、その人がこの現世の生に対して高い運命愛を有することは理論的に予測しうるものである。そこで本研究では本来的時間性の概念が運命愛の程度に影響を及ぼしうる要因であるという仮説を措定し、同概念の測定尺度の作成を試みつつ、その仮説の検証を図ることとした。なお、本来的時間性に関する尺

度の構成にあたっては、ハイデガーの著書<sup>13)</sup>で用いられている表現に基づいて、表5に示した本来的時間性の測定項目を設定し、これらの加算平均でもって尺度を構成した。

表5 本来的時間性尺度の質問項目

\*は逆転項目。1-7の7件法

- ・人はいつ死んでもおかしくないと思う。
- ・自分が死ぬなんてことは、全く想像できない。
- ・「明日、自分が死ぬこともあるだろう」と当たり前を感じる。
- ・「自分もその内、死ぬんだなあ」と自然に感じる。
- ・この世の中、何が起っても全然不思議ではないと思う。
- ・何も努力していなくても、きっと自分の人生はうまくいくと思う。\*
- ・今さえ良ければそれでいいと思う。\*
- ・昔のことは、だいたい忘れる。\*
- ・何かやるとき、経験があるかないかで、全然違う。

## 2.4 死に関する経験や伝聞

先述の通り、本来的時間性の根幹にあるのは「死」に対する認識である。したがって、身近な人の死を体験したり、それに関する伝聞経験のある人程死について考える契機を得、高い本来的時間性傾向を有する可能性が増進するものと考えられる。

については「臨死」、「家族の死」、「身近な知人の死」に関する経験、またはそれについての伝聞経験の有無について質問し、本来的時間性傾向との関連を検証することとした。

## 2.5 想定する因果構造と調査概要

以上の尺度間に、それぞれの理論的背景を踏まえて図1の因果構造を想定した。そしてその妥当性を検証するため、インターネット上でのアンケート調査を実施した。サンプルの募集は楽天リサーチに依頼し、同社にモニター登録している日本人300サンプル(男女各150サンプル)を対象に調査を行った。

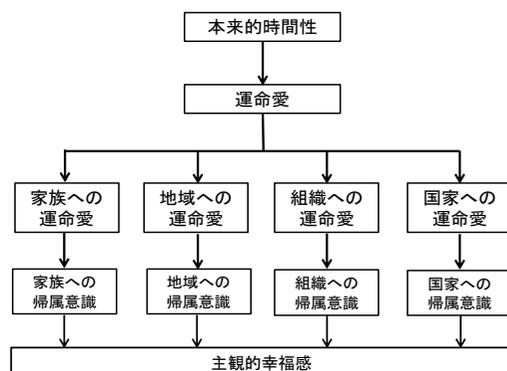


図1 想定する因果構造

## 3. 結果

### 3.1 相関関係の検証

図1で示した因果構造に沿って各尺度値間の相関分析を行った。結果を表6~10に示す。

相関分析の結果、一部を除いて全ての尺度間で統計的有意な相関関係が見られた。図1での想定通り、①高い本来的時間性を有する被験者はその運命愛傾向も高く、②運命愛傾向が高いと各共同体への個

表6 本来的時間性と運命愛の相関分析  
注：\*\*\*:p(有意確率)<0.01, \*\*:p<0.05, \*:p<0.1  
(以下の相関分析結果についても同様。)

	運命愛	N
本来的時間性	0.187(***)	300

表7 運命愛と共同体別運命愛との相関分析

	運命愛	N
家族運命愛	0.481(***)	300
地域運命愛	0.104(*)	300
組織運命愛	0.257(***)	300
国家運命愛	0.465(***)	300

表8 共同体別運命愛と帰属意識の相関分析

	家族運命愛	N
家族人間疎外	-0.733(***)	300
家族コミットメント	0.745(*)	300
地域運命愛		N
地域人間疎外	-0.794(***)	300
地域コミットメント	0.751(***)	300
組織運命愛		N
組織人間疎外	-0.835(***)	300
組織コミットメント	0.698(***)	300
国家運命愛		N
国家人間疎外	-0.623(***)	300
国家コミットメント	0.778(***)	300

表9 帰属意識と主観的幸福感の相関分析

	valence	activation	認知的幸福感	N
家族人間疎外	-0.110(*)	-0.061	-0.072	300
家族コミット	0.126(**)	0.093	0.156(***)	300
地域人間疎外	-0.257(***)	-0.325(***)	-0.198(***)	300
地域コミット	0.329(***)	0.451(***)	0.327(***)	300
組織人間疎外	-0.202(***)	-0.197(***)	-0.165(***)	300
組織コミット	0.238(***)	0.259(***)	0.183(***)	300
国家人間疎外	-0.083	-0.111(*)	-0.080	300
国家コミット	0.142(**)	0.135(**)	0.115(**)	300

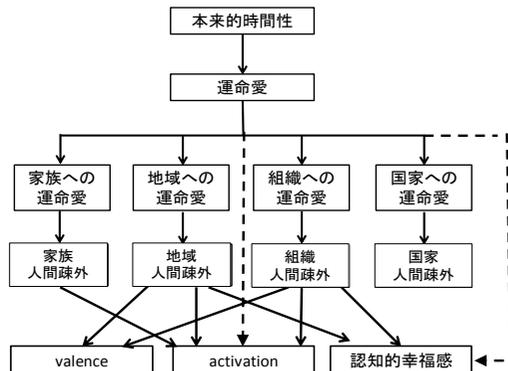
表103 背後の心理要素と主観的幸福感の相関関係

	valence	activation	認知的幸福感	N
運命愛	0.102(*)	0.188(***)	0.183(***)	300
本来的時間性	-0.046	0.014	-0.032	300

別の運命愛も高くなり、個別運命愛が高いと帰属意識が高く(人間疎外意識が低減、コミットメントが増大)なり、④帰属意識が高い程主観的幸福感が高くなる可能性が示唆されたものといえる。また、背後の心理要素と主観的幸福感との相関関係についても検証したところ、運命愛と主観的幸福感の間にも正の相関関係を確認することができた。

### 3.2 直接的な影響力の検証

相関分析で明らかになった各尺度間の関連性が直接的な因果関係によるものか検証するため、共分散構造分析を行った。結果を図2に示す。なお、運命愛尺度が主観的幸福感到直接的な影響を及ぼしている可能性も加味し、運命愛尺度から主観的幸福感尺度への直接的なパスも想定して分析を行った。



注1: 有意なパスのみ表示。点線は運命愛から主観的幸福感への直接のパスを示す。

注2: 帰属意識に関しては、複数の中から哲学にて想定されている人間疎外を用いた。

図2 共分散構造分析結果

N=300,  $\chi^2=78.962$ ,  $\chi^2/df=2.025$ , AGFI=0.910, NFI=0.958, CFI=0.978, RMSEA=0.059

共分散構造分析の結果、背後の心理要素から帰属意識(人間疎外尺度)へは負の有意なパスが確認され、本来的時間性や運命愛が帰属意識に直接的な影響を及ぼしている可能性が示唆されている。

また帰属意識が主観的幸福感到及ぼす影響については、家族への帰属意識が感情的幸福感到の一つである activation 値に、地域と組織への帰属意識が全ての主観的幸福感到直接的な影響を及ぼしていることが示唆された。一方、国家への帰属意識に関しては幸福感到への有意なパスは見られなかった。

### 3.3 死に関する経験と本来的時間性との関連

最後に、本来的時間性傾向につながりうる個人属性として仮定した「死に関する経験・伝聞」のダミー変数と、本来的時間性との間で相関分析を行った。結果、全ての項目間で正の有意な相関関係が確認でき、死を身近に感じる機会、伝聞経験のある被験者程、高い本来的時間性を有する可能性が示唆された。

### 4. 考察

人々の幸福に共同体への帰属意識が重要な役割を担っている事、ならびに、その帰属意識の規定因に「運命愛」があり、さらにその背後に「本来的時間性」が存在する事が示された。さらに、その本来的時間性には、死を身近に感じた経験や、その伝聞経験が関係していることも示された。すなわち、「死に関わる契機があった人程、自らの死を含めた将来起こりうるあらゆる可能性を想定し、過去の歴史の記憶を保持し、その重要性を噛みしめる傾向が強く、

表11 死に関する経験と本来的時間性の相関分析

	本来的時間性	N
臨死体験ダミー	0.103(*)	300
臨死伝聞ダミー	0.214(***)	300
家族の死経験ダミー	0.148(**)	300
家族の死伝聞ダミー	0.236(***)	300
知人の死経験ダミー	0.134(**)	300
知人の死伝聞ダミー	0.217(***)	300

注: 数値は相関係数。ダミー変数は経験・伝聞経験が「たくさんある」、「ある」と答えた場合に1、「ない」の場合は0

その結果、また所属する共同体とも真摯に対峙しながら生活する可能性が示唆された。そしてその結果として幸福感到も高くなる傾向が示された。

なお、帰属意識の背後にこうした構造が存在するならば、人々の本来的時間性を促進する取り組みが、人々の幸福に配慮した共同体施策として有効である可能性が示唆される。例えば死に直接関わる災害や戦争の体験についての物語の共有は、人々に「死」を身近に感じさせ、本来的時間性を促進する一助となる可能性も考えられる。そしてそうした取り組みが社会的に様々に展開されることで、人々の運命愛的傾向を増進させることが考えられ、それがひいては、各組織への帰属を促し、最終的には、主観的な幸福感到の醸成に繋がり得るものとも考えられる。

#### 参考文献

- 1) 国民生活白書 平成19年度版, 内閣府
- 2) Porter, L.W., Steers, R. M., Mowday, R. T., & Boulian, P. V. (1974). Organizational commitment, job satisfaction, and turnover among psychiatric technicians. *Journal of Applied Psychology*, 59, 603-609
- 3) 高橋弘司, 渡辺直登, 野口裕之, John P Meyer(1998), 3次元組織コミットメント尺度日本語版の翻訳等価性の検討: 日本-カナダ比較, 経営行動科学学会年次大会発表論文集(1), 159-169
- 4) 青木恵之祐(2001), 従業員の心理的契約と組織コミットメントが退職意思に及ぼす影響について, 産業・組織心理学研究 15(1), 13-25
- 5) 板倉宏昭(1999), 3次元組織コミットメントと組織貢献度, *Journal of Japan for Management System Vol.16 No.1*, 7-12
- 6) 田尾雅夫(1997), 「会社人間」の研究: 組織コミットメントの理論と実際, 京都大学学術出版会
- 7) 渡邊望, 羽鳥剛史, 藤井聡, 竹村和久: 近代大衆社会における人間疎外と大衆性についての実証的研究, 土木計画学研究・講演集, Vol.40, 2009.
- 8) 田中佑子(1996), 単身赴任者の組織コミットメント・家族コミュニティとストレス, *社会心理学研究* 12(1), 43-53
- 9) 北川夏樹(2011), 共同体からの疎外意識が主観的幸福感到に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集 D3(土木計画学), 67(5)(土木計画学研究・論文集第28巻), I327-I332
- 10) Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., Griffin, S.(1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 1985, 49.1
- 11) Jakobsson Bergsted, C., Gamble, A., Gärling, T., Hagman, O., Polk, M., & Ollsen, L. E.(2009b). *Subjective well-being related to satisfaction with daily travel*. Unpublished manuscript.
- 12) ニーチェ全集 第八巻(1962), 理想社
- 13) マルティン・ハイデガー著, 細谷貞雄訳(1994), 存在と時間(下), ちくま学芸文庫